第１２回池田町・地方創生戦略町民会議　議事概要

□　開催日時　　令和３年２月２５日（木）14：00～17：00
□　場　　所　　能楽の里文化交流会館２階　大会議室
□　出 席 者　　委員 12 名　行政９名　事務局５名
□　傍 聴 者　　２名

□ 開会

□ 委員長挨拶

□ 報告事項
　○「池田町地方創生総合戦略」改訂に向けた議論の概要について
　　副町長が資料に沿って説明

□　協議事項
　○「互助」をどう進めるかについて

□ 意見交換・総評
　議題１　話し合いのための場づくりをどうするのか
　議題２　話し合いの場づくりとも関連させながら、以下の分野で、自分なら、また、地域ならどういうことができるか（グループ１（以下、Ｇ１）：空き家
　　グループ２（以下、Ｇ２）：福祉　グループ３（以下、Ｇ３）：防災）

　Ｇ２：　話し合いのための場づくりについて、池田町全体では青年団の青年の家があるが、角間郷自治振興会には、農地関係、福祉、伝統料理や昔ながらの加工品関連など３つの部会があり、そういう場を利用すると良い。話し合いの場は区の集まり・常会が良いが、未来を考える議論が進まない可能性もあるので、食事しながら気軽に話せる回を設けると良いし、いつも活動しているチーム内でまず話し合うと未来を考える議論が進むのではないか。

　Ｇ１：　話し合いのための場づくりについて、集落の場を活用するが、場に出ていない人たちが参加できるよう、日程を選べるようにする。また、重い話題だと参

加し難いので、楽しく幸せになる話題で和気藹々と話すと良い。集落の町民会議的なものだと年齢や世代を問わず、様々な方が話し合いの場に参加でき、様々な意見が出て、皆さん一緒に取り組める。それには区長の力が必要になるが、区長一人だと大変なので、さらに２～３人キーパーソンとなる人が必要だ。Ｇ１は皆キーパーソンとなり区長を支える。100%をいきなり目指すのは難しいので、少しずつ進めていけたらと考える。

Ｇ３：　話し合いのための場づくりについて、未来について深刻に話し合う場が今はなかなかない。例えば、以前は町民が役場で職員と時間をかけて話せたが、今は職員が忙しそうなので、ちょっとした質問ができアドバイスをもらえる気楽なコミュニケーションをとれる場や時間がかなり減っている気がする。一昔前が全て良かったということではなく、今はコロナ禍でもあるが、コミュニケーションの在り方自体が今の世代で変化しているので、昔のやり方を押し付けても上手くいかない。また、以前はソフトボールなどスポーツが多世代のコミュニティづくりの場で、試合をする中で、知り合い、仲良くなる。役場職員もいると未来についての気軽な話し合いの場となり、スポーツを通じた話し合いの場の意義は非常に大きかった。今は子どもの人数が少ないので、集落などで子どものための行事が少なくなり、集まりの場が減っている。

ただ、手芸やヨガなどのグループが池田に多くあり、風力発電やダムやトンネルなどの話も気軽に出るので、「ちょっといいですか？まちの話」を活用して、池田の未来を話すことが大事だ。また、女性の区長がいても良い。

委員長：話し合いの場ということで、大きく二つに分かれ、一つは公式的・区の制度的な集まりの場で、もう一つはスポーツや趣味など非公式的・制度的でない場だ。二つを上手く使い分けることも大事だが、話し合う内容も、直面している課題や未来や夢などの物事を決めるための話し合いだけではなく、自由な放談会的にざっくばらんに話し合う機会も実は大事である。

区長だけに頼っては大変なので、キーパーソンをどう作るのか、また、どう見出すのかの議論を深めることも必要だ。

Ｇ２：　「福祉」分野で何ができるかについて、高齢一人暮らしの家の固まった雪をどかしたり、買い物に連れて行ったり、集落の人が歩いていたら声をかけて車に乗せたり、子守をしたり、してもらったり、干してある洗濯物を取り入れたりぐらいはできる。お年寄りが集落センターで話し合える場を作るのも良い。場作りは、趣味が合う人同士が集まり、徐々にすると成果が見えてくる。

G１：　「空き家」分野で何ができるかについて、まず使う予定があるか持ち主の意向を確認し、活用意向であれば、空き家の登録を働きかける。空き家を登録することは地域に移住者を受け入れていくことなので、集落として受け入れる態勢や維持管理の体制を決め、草刈りや空き家の見守りや雪下ろしなど保全をみんなで協力してやっていく。最後に、宿泊施設や皆が集える場が考えられるが、地域での空き家の活用も話し合う。自分自身は、集落でのルールや学んだことを伝えたり、町外から来るスタッフや池田に興味がある観光客に話をしたりできるので、このような仕組みがあると紹介できる。

G３：　「防災」分野で何ができるかについて、ご近所防災マップは区役員などを中心にされているようだが、持ち帰って家庭で共有されていない。おにぎり作りを自分たちでどう対応するのか、地震の発生時にどう行動するのかはご近所防災マップでは網羅されておらず、誰も分からない。また、広域的な避難訓練ではなく、集落ごとの避難訓練をしないと実際的でない。

災害発生時に高齢者を乗せられる車椅子やロープ、ブルーシート、ジャッキなどの備品を集会所に用意しておくことが大事だ。道具の選定や使い方や避難の仕方などを消防から学べると実際に動ける。集落で自分たちがどう行動し、日赤奉仕団とどう連携するのか落とし込む必要がある。

昼だと小さい子の場合やお年寄りだけの場合などもあるので、昼と夜を区別して状況を把握する必要がある。自警団や消防と連携して各集落で話し合うなど、災害に備えて細かい行動計画を作らないと実際に災害が起きた時に動けないのではないか。防災士の資格を持つ人が集落にいると良い。

副町長：防災について、役場は避難所運営や災害発生現場の対応に人手が割かれ、避難時の誘導などまで手は回らない。役場は避難指示を出せるが、避難自体は集落ですることとなるが、それで大丈夫かどうか意見を聞きたい。

委員：　災害はいつ起きるか分からない。道具の確保は必要だが、各集落に全部揃えることは不可能だと思う。毛布と竹で担架を作ることができ、一輪車で人を運べる。役場や消防は災害が広域の場合は各集落に行けないので、自分の地域は自分で守る自主防災をしなければならない。池田では自主防災ツールは作っていないが、火災時に水をかけて火を消す自治防災消防隊連合会はあり、その人達は集落にいるので、災害発生時にはその人達を中心に、要救助者を助けることができる。また、自治防災組織を作る際に、夜は夜だけ、昼は昼だけの組織を作る必要がある。昼の場合は、若い人が町外に出ていて、年配の方が多く、高齢者だけの場合は通報だけで避難の補助はしないなどのできる範囲で良い。

第一避難所に集まれる人だけで協議して対応してもらう。各集落で区長がいなくても何をするか協議することが一つの場づくりとなる。

総務財政課長代理：Ｇ３の意見に補足すると、防災士について、役場からは区長に案内しているだけで、集落には広く周知されていない場合がある。集落ごとに防災訓練をする時にも自分たちが立てた避難計画が実際にうまく機能するかを消防署など専門家に確認してもらう必要がある。日赤奉仕団や自警消防団などは個々に訓練をしているが、実際の災害発生時や防災の備えをする際に横の連携が機能するように事前に調整する必要があるので、連携のきっかけを役場が働きかけられるのではないか。また、実際に何か起きた時に消防団や各集落にいる防災隊長だけでは補えない際には、動ける人が動けるのであれば、役場ができることもあるのではないか。

副町長：役場に頼みに行くのは良いが、役場が調整するとなると、主体性が逆転してしまう。役場は実際の災害発生時に集落に行けなくなるので、防災訓練などは集落が主体的にしないと防災上難しい状況になるのではないか。

Ｇ３：　役場に何でも調整して欲しいのではなく、あくまでも自助と互助の出発点だが、わからないこともあるので、プロに聞いた上で、自分たちでできることをしっかりまとめようということだ。

　また、ご近所防災マップを役員や自警団などが作ったと思うが、避難手順や要支援者やマップなど集落の全員に伝わっておらず、どんな行動をするべきか分からない。万が一の時に役場に避難指導を全てして欲しいのではなく、避難の仕方や防災の方法をプロにまず１度指導してもらいたいということだ。その相談は自警団の団長か区長か防災隊長がすることになるかと思う。

副町長：今までは役場がマップを作りましょうと言って作ってもらったと思うが、区長がマップを持っていることを集落全体が知らないということが池田全体で起きている。本当は全員が知らないといけないので、集落の代表である防災隊長がこれではまずいと提言して欲しいがどうか。

委員：　ご近所防災隊長を決め、ご近所防災マップを作る依頼が６年程前に役場からあったが、ご近所防災隊長を各集落でその時に決めている筈で、主に自警隊の隊員がなっていると思うが、地域で動ける人は昼間と夜では違うし、６年経ち対応が難しくなっている場合もあるので、もう１度見直さないといけない。各集落で話をすることから始め、防災訓練をしよう、プロの人に見てもらおうと

なれば、次の手を考えれば良く、まずは自分らでできる範囲で考えておく必要がある。限定的な被害の出る水害や火事はある程度は救助がくる可能性もあるが、大規模な地震が起きた時には、救助はすぐには来ないし、断水や停電などライフラインも止まる可能性もあり、自分たちのことを自分たちでどう対応するか集落で話しておくのが大前提だ。

委員：　防災隊長はいるが、防災について、何を備えるのかどのように避難するのかなどの話がない。住民は集落センターで区長の指示を仰げば良いという認識かと思う。災害時にはセンターで炊き出しができるのか、持ち寄りが良いのかなども決まっていない。以前の豪雨時に自警隊員だったが、情報が来ず、危険個所の見回りだけした記憶だ。公助で最低限することや区ですることを区長に伝え、そこから住民が区でするべき訓練や備えの話が徐々に届いていくのではないか。区長だった時に大雨が降って、役場から水位がどの位かと問合せが来たが、水位を測る目印も橋になく、大丈夫ぐらいしか言えない。

副町長：みんなで防災マップを作って活用する想定だったが、形式的にマップを作ったままになっている。防災は地域でどうするのか考える必要があるし、役場も関わる必要があるので、まさに自助と公助の連携で、役場が基本的な考え方を示して、地域のみんなが考えていくことも必要だ。

水位については、役場の伝え方がよくなかったが、避難指示を受けてから避難する考え方ではなく、自分たちで避難の判断をしなければならないのではないか。水位については水位を報告して欲しいのではなく、自分の身は自分では守るために、この雨量や水位は異常だから避難指示は出ていないが集落センターに集まろうと集落で判断してもらいたいということだ。

委員長：防災は特に近年身近な問題になっているので、自助、互助、共助、公助をどのように考えるか良い議論の機会になった。例えば、集落で考えたことを役場で話して完成度をあげると良いが、テーマによっては、集落で話すべきことを役場から投げ掛けたり、情報共有の場を用意したりする必要がある。

□ 次回の日程について

次回について、日程が決まり次第ご案内する。

□ 副委員長挨拶

□ 閉会